

1

テレマティクス自動車保険の 課題と展望

慶應義塾大学商学部教授
堀田 一吉

近年、欧米においてテレマティクス自動車保険が大きな注目を集めている。わが国でも今年度に入ってから、テレマティクス自動車保険を取り扱う保険会社が相次いでいる。今後、さらに追従する保険会社が登場する動きもあり、いよいよ、わが国でも本格的な導入が見られる状況である。導入に際しては、法律的ならびに経済的な環境整備をはじめとして、様々な課題が存在している。テレマティクス自動車保険の現状を分析し、課題を整理することを通じて、将来性を展望する。果たして、わが国に定着する新たなビジネスモデルになりうるのか議論をしてみたい。

共同研究「テレマティクス自動車保険の現状課題と将来展望」(日交研シリーズ A-646)

1. はじめに

テレマティクス (Telematics) とは、通信 (Telecommunication) と情報科学 (Informatics) を組み合わせた造語であり、自動車などの移動体に通信システムを組み合わせて情報サービスを提供する新しい技術である。近年、このテレマティクス技術を応用して台頭を見せているのが、テレマティクス自動車保険である。これには、走行距離に応じて保険業が変動する「走行距離連動型保険料方式 (PAYD: Pay As You Drive)」と、走行距離だけでなく速度や急加速、ブレーキ回数など運転者の運転行動を分析して保険料に反映する「運転行動連動型保険料方式 (PHYD: Pay How You Drive) の2種類がある。近年特に注目されているのは、PHYD型のテレマティクス自動車保険である。現在、テレマティクス機器が次々と開発されて、集積されたデータを解析して、安全性やリスクに関する評価手法の開発が進められている。

2. 仕組みと効果

1) テレマティクス技術による入手情報

テレマティクスは、機器性能の進化とともに、入手できるデータも多様になっている。獲得可能な主な情報は、①運転者の特定、②走行距離、③走行速度、④走行時間、⑤走行地域 (位置情報)、⑥急加速/急ブレーキの回数、⑦ハンドル操作の安定性 (急ハンドルの頻度、カーブ操作など) などである。

現在のテレマティクス技術は、多くのデータを入手することが可能な状況にある。しかし問題は、これらのデータから、どのような行動を取る運転者のリスクが高いのか、立証できるかである。急ブレーキをする運転者は、確かに危険な運転ではあるが、そのことが、実際に事故を起こしているかどうかは、実は別の問題である。データを提供した運転者のほとんどが、実際には、無事故で運転を続けており、様々なデータの中から、何か原因で交通事故になったのかを検証できるデータではない。

2) テレマティクス自動車保険の効果

テレマティクス導入は、次のような経済的ならびに社会的効果が期待されている。第1に、より詳細なリスクに基づく保険料設定がなされることである。テレマティクス自動車保険が画期的とされるのは、個人の行動に基づいた保険料を設定することで、従来よりも個人的責任による料率体系を実現できるのではないかといいところにある。第2に、安全運転が促進されることである。個人の行動結果が直接的に保険料に反映されることになれば、保険料を軽減させることになれば、安全運転を促すことが想定される。第3に、社会的に事故防止対策への貢献がなされることである。テレマティクスが事故抑止に大きな効果をもたらすことになれば、社会にとっても大変に有益である。第4に、交通事故が減ることで、保険金支払いの削減されることになる。そのことは、契約者の保険料負担の軽減を通じて、社会全体にとって還元されることになる。第5に、全体として保険料負担が軽減されるとすれば、保険加入を促すことになる。それは、無保険車対策にもつながるであろう。

しかしながら、テレマティクス自動車保険では、詳細な保険料設定や事故の削減等のさまざまな効果が期待されるが、多くの効果を得ようとすれば、より多くの顧客のデータを常に収集する必要がある。収集データの内容や頻度等により、プライバシーの侵害を懸念する顧客には受け入れられない可能性がある。

3. 普及の現状

1) 英米におけるテレマティクス自動車保険の現状

英米では、プライバシーへの懸念からGPS情報を保険会社が入手することへの抵抗が根強い。常時監視されているのではないかという抵抗感が強く、走行日時・時間や走行場所などの運転行動の把握には限界がある。テレマティクスに基づく情報を基本的には保険料の割増には使用していない。現段階ではスマートフォンをテレマティクスのメイン機器として利用するには至っていない。

2) 日本におけるテレマティクス自動車保険の現状

日本でも、英米に追従する形で、テレマティクス自動車保険の導入の動きが見られているが、現時点では、導入の形態（使用機器や導入方法）は、各社まちまちである。現時点では、テレマティクスを通じて、優良顧客の「囲い込み」の色合いが強く、経営戦略的に導入されているとはいえない。個人向けは、契約者の新規開拓と、マーケットシェアの拡大であるのに対して、法人向けは、従来サービスの一部に過ぎない。テレマティクス自動車保険の導入の目的が必ずしも定まっておらず、テレマティクス技術を通じて得られたデータを、どのように評価するのかが確立されていない。现阶段では、リスク情報と保険料設定との関係性に、合理性が認められないことが問題である。

4. 課題

テレマティクス自動車保険には、イノベーションとして多くの効果やインパクトをもたらす、魅力的な部分も多いのであるが、他方で、以下のような課題を指摘しなければならない。

第1に、情報セキュリティ管理（プライバシー）問題である。テレマティクスを通じて入手される情報は、高度にプライバシーに関わる部分がある。保険会社は、データ管理により慎重な対応が求められる。第2に、適正なデータ分析、公平性問題である。データ分析技術の高度な専門性に加えて、データとリスクとの間の因果性についての理論的確立が必要であり、それがなければ制度自体が不安定な状況に陥りかねない。第3に、データ提供の恣意性問題を指摘しなければならない。自分にとって都合のいいデータだけを提出し、不都合なものは提出しないとすれば、データ全体の信ぴょう性にも関わる深刻な課題となりかねない。

第4に、過当競争（不当競争）の可能性である。理論的根拠が十分でなければ、不当な保険料競争（ダンピング）に陥りかねない。第5に、保険会社にとっては、テレマティクスによって、いわゆる「クリームスキミング（いいとこ取り）」の行動として合理性を見出しうるが、この保険が本格的に導入されると、自動車保険市場全体に対するインパクトが少なくない。第6に、保険会社にとって重要なのは、運用コストである。データ管理に係る膨大な費用をかけて、テレマティクスを運用することで、費用対効果において圧倒的なメリットが見込めない限り、本格的導入は難しい。最後に、第7として、国民の容認をいかに得るかである。国民がテレマティクスに対してどう反応を示すかは今後の様子を見るほかはない。これは、国民性が強く反映するものと考えられる。

図1 テレマティクス自動車保険の課題

- 情報セキュリティ管理（プライバシー）問題
- 適正なデータ分析、公平性問題
- 機器性能の向上（導入コスト）
- データ提供の恣意性問題
- 市場安定性の確保（過当競争の排除）
- 普及促進のためのインセンティブ
- 消費者保護の体制整備

こうした運用上の問題に加えて、より根本的には、テレマティクスをはじめとするビッグデータを扱う専門家（データサイエンティスト）の養成は、国家を挙げての緊急課題である。

5. おわりに

テレマティクス自動車保険は、英米での動向に追従する形で、日本でも、本格的な導入が進められつつある。ただし、その導入の進め方には、各社それぞれの戦略的思惑が見られる。テレマティクスから得られるデータ量ならびに科学的分析は、現時点では十分とは言えない。また、保険料率（＝リスク）に反映させるためのロジック（科学的根拠）は未だ不明瞭な点が多い。テレマティクスを本格的に導入するには、消費者に対する理解が十分になされることが大きな課題である。さらに、業界共通のガイドラインの策定も必要である。現在のビッグデータの技術（ICT）の発展は、保険業の将来に大きな変革をもたらす可能性がある。テレマティクスによるデータを、他業種との連携を図ることで、付加価値を生み出す可能性は大きい。

参考文献

竹井直樹（2015）「高齢者の交通事故と自動車保険」堀田一吉、山野嘉朗編『高齢者の交通事故と補償問題』慶應義塾大学出版会

佐川果奈英（2012）「テレマティック自動車保険—イギリスにおける動向を中心として—」『損保総研レポート』第101号 損害保険事業総合研究所

牛窪賢一（2014）「価格比較サイトとテレマティクス自動車保険—イギリスの個人自動車保険市場における動向—」『損保総研レポート』第108号 損害保険事業総合研究所

古橋喜三郎（2015）「米国のテレマティック自動車」『損保総研レポート』第111号 損害保険事業総合研究所